資料－３

手づくり郷土賞（ふるさと） 選定委員会

全 体 講 評

昭和６１年度に創設以来、２６回目を迎えた「手づくり郷土賞」ですが、今年度も全国各地から数多くの取組の応募がありました。応募された取組は、創意工夫に溢れ、地域の方々の熱意と努力が伝わるものばかりでした。

今回の受賞箇所を見てみると、身近な社会資本を舞台として、歴史や自然をテーマに活動している取組が多く見られました。古くからある地域固有の歴史に着眼し、社会資本を復元して新たに活用している事例や、身近な自然を舞台に、その保全・再生や環境学習等を行っている事例などがそうです。活動事例の中には、社会資本の計画段階から積極的に参加し、自ら考え、工夫を凝らしながら実施している取組、複数の団体が連携しながら活動全体を支持している取組、息の長い地道な活動により地域に根付いている取組などが見られました。

今年度は、東日本大震災の発生や台風の上陸等、各地で相次ぐ自然災害に見舞われ、地道に作られてきた「郷土」が一瞬にして消失しました。しかし、そのような中、助け合いながら復旧に立ち向かう人々の姿は、世界から賞賛され、改めて、人と人のつながりが注目されました。今後の復興、日本の再生に向けては、地域のつながりや地域の発想が重要となります。今回の「手づくり郷土賞」の応募案件には、住民が発想し自らの手で施工が行われた取組や、地域間で交流・連携している取組といった、地域に根ざした取組が見られ、まさに、これらは日本の再生に向けた活動の先駆けとなる事例と言えるでしょう。

今後も、各地域において更に充実した活動に取り組まれ、長い年月にわたって活動が継続されるとともに、このような取組を参考として、他地域でも新たな発想や工夫が生まれ、魅力ある地域づくりが全国各地で展開されていくことを選定委員会一同期待します。

選 定 委 員 講 評

西村　幸夫　委員長

平成 23 年度の手づくり郷土賞一般部門および同大賞部門の審査を担当して、感じることは、以前にも増して、身近な公共財をいかに磨いていこうとしているかという姿勢の活動が受賞対象として多くなっているということでした。とりわけ今年は古道や小河川など、比較的小さなそして自然とともにある資産を再発見したり、大切に思う気持ちを共有しようという活動が目につきました。

大賞部門に至っては４件すべてがそのような資産である点は、印象深かったです。国土をつくっていくという言葉の意味がこの２，３０年のうちにこれほどおおきく旋回するとは思いませんでした。しかし、私たちの居住世界をかたちづくる基盤となっているものをインフラと呼ぶならば、こうした資産群はまさしく大切なインフラなのです。このことを例年にもまして一層実感させてくれる今年の受賞プロジェクト群でした。受賞された案件の背後にある、想いがかたちになるまでの永年のたゆまぬ活動に敬意を表したいと思います。

大村　哲夫　委員

平成 23 年は１月の新燃岳の噴火に始まり、３月には全国民が恐怖に慄いた東日本大震災、更には、相次ぐ台風の上陸に伴う災害が発生しました。そんな災害の中、助け合いながら復旧に立ち向かう日本人の姿は、世界から賞賛されました。

今年の手づくりふるさと賞の応募は、地域の皆さんが助け合いながら、地域の財産である社会資本を守り育てておられる活動が多くありました。審査の過程で、長期に及ぶ公共事業の削減や地域経済の疲弊に、「自分たちがやらなければ」と言う強い思いを感じました。

残念ながら東北の被災地からの応募は１件しかありませんでした。それどころではないと言うのが実感だと思います。

これから長い時間をかけて、復興に取り組まれる中で、絆を大事にした、手づくりの元気な活動が、一日も早くこの賞の候補に挙がってくることを希求してやみません。

金安　岩男　委員

応募案件の中に、物的な施設の活用に加えて社会関係資本に関する表現が増えつつあるのも近年の特徴の一つです。これは、関係者内の連携の度合いを強くする努力、異なる分野との橋渡しの工夫、そして活動全体を支持する働きなどが考えられ、人々の連携の力の大切さを物語っています。

手づくりによるまちづくりは、個々の人々の工夫と知恵をどのようにして仕組みに仕立て上げ、動かしていくかが肝要です。選定委員としては、応援したい試み、期待したい試みが多数出てくることをいつも願っています。そして一個人として、その土地に足を運んでみたくなるかどうかが楽しみです。

今年度も各地の関係者のご努力により、よい事例が多数応募されていることに敬意を表します。

佐々木　葉　委員

今年から手づくり郷土賞の審査に加わることとなった。この賞の存在は、各地で見かける立派なプレートによってかねてから知っていた。それらはいささかバブリーにデザインされた公共空間などで見たようにも思うが、現在ではかなり様子が違っている。形としての成果よりも、地域住民の活動とそれによって維持、形成される地域への関心と愛着、そして賑わいが重視される。その意味で選定結果は時代を反映する。

では、今回選定されたものからどのような時代

が見えるのだろうか。顕著な傾向を指摘できるわけではないが、あえて言えば、現代人の手によって創造された歴史と自然、という価値を感じるものが多い。歴史のオーセンティシティ（本物性）や天然由来の自然環境ではなく、現代からの解釈やテーマ性のある歴史、人工環境としての水や緑や生き物の生息地をまちづくりの核としている。それらが思いつきや化粧でなく、地域に根付いてきたものが高く評価された。

ふるさとはまさに人の手によって作り出される。東日本大震災によって一瞬にして多くのふるさとが消失した。その再生にむけて、今回の選定事例に蓄えられたふるさと創造の知恵とエネルギーが活かされることを願う。

田村　美幸　委員

選定に当たって特に留意した点は、地域の社会資本を地域住民がいかに有効活用して、地域の魅力向上のために努力しているかということであった。これは選定の際の評価条件としても述べられている。「手づくり郷土賞」という名の賞に相応しく、創意と工夫の人智が活かされているか、そしてその結果の積み重ねが、地域の人々の心を豊かにし、郷土愛へと誘導しているかを評価したいと思った。入選した中では、住民自らゴミ集積箱を木で囲むという、手づくりの景観修景からスタートした中山道「御嶽宿」が良い事例であると思う。

もう一点は、自分がそこに行ってみたくなるかどうかということである。住民の努力によって魅力的な町になっていれば、一度行って見てみたいと思うであろう。行って観て、住民がどういう工夫をしているかなどが分かれば、それはただ自然が美しいだけの観光地よりずっと面白く、興味がわくに違いないと思っている。

藤吉　洋一郎　委員

行政が作り、住民がそれを活用するという従来のパターンが、次第に発想段階から計画、着工、完成、そしてその後の活用・維持へと変化してきていることを感じた。

それだけ社会資本の整備が進み、住民の目線が身近な環境に向けられるようになり、自ら参加して整備、活用へと進展していることがうかがえる。

地域の活性化は座して待つだけでは望めない。住民が発想し、参加して初めて可能になることを各地の試みが教えてくれていると思う。

米　美知子　委員

各地域から応募された創意工夫溢れる取り組みを興味深く拝見いたしました。応募資料からは、その取り組みに携わる方々の熱意と努力がひしひしと伝わり、各地域が未来に残したいふるさとの魅力を感じることができました。

今回は、すでに使われなくなった山道やトンネルを整備し、新たな活用をしている地域も複数受賞しました。歴史的に役目を終えたと思われている社会資本に着目して、掘り起こした取り組みです。また、河川や運河の清掃・整備により、防災拠点や地域住民の憩いの場としている地域、宿場町ならではの景観を再生してした地域など、近隣住民に身近な社会資本に対する取り組みも多くみられました。

今後も地域の活性化や自然の再生・保護など、多種多様な社会資本の有効活用を期待しております。そして地道な努力を続けられている全国の皆様に、敬意を表したいと思います。